

聖書：マタイ 8：28～34

説教題：闇の支配からの解放

日時：2019年1月13日（朝拝）

この前はガリラヤ湖の嵐を静めたイエス様についての記事を読みました。そこで示されたことはイエス・キリストは大自然の上にも権威を持ちたもう方であるということでした。それに続く今日の箇所では、霊の世界の上にも権威を持ちたもうイエス・キリストのことが述べられて行きます。さっそく内容を見て行きますが、イエス様は向こう岸のガダラ人の地にお着きになりました。ここはガリラヤ湖の東側、デカポリスと呼ばれる地域の一部であったようです。後でユダヤ人にとって汚れた動物である「豚」が出て来ますように、異邦人が多く住む場所でした。イエス様が岸に着くと悪霊につかれた人が二人、出て来ます。彼らは不気味な人たちだったと思います。二人は「墓場から」出て来ました。人間の普通の生活からは切り離され、半分死んだ世界にあるような人たち。その彼らはひどく狂暴であったとあります。マルコの福音書の平行記事を見ると、誰かが足かせや鎖でつないでも、それを引きちぎり、砕いてしまう。そして夜も昼も叫び続けて、石で自分の体を傷つけていたとあります。その上、近くを通ろうとする人に危害を加えようとしたのでしょう。誰もその道を通れないほどでした。彼らはこうしてその生活を破壊され、健康も破壊されていました。道徳的にも精神的にも異常な状態で、どんな戒めも刑罰も理性も良心も彼らをつなぎとめておけませんでした。彼らは狂い、暴れ、他の人を威嚇し、また自分で自分を滅ぼすような生き方をしていたのです。

さて、これは遠い昔の世界の話なのでしょうか。科学が発達した現代ではお話にもならない話なのでしょうか。昔の人は何か異常なことがあるとすぐ悪霊の力やたたりのおせいにした。雷がなれば神の怒りのしるしと考えたり、不思議な現象に接すると、超自然的な霊の世界からのメッセージだと考えたり、・・・しかし今日からすれば、それは無知蒙昧の迷信に過ぎない。ここに出て来る二人も悪霊つきと言うより、精神的な病気あるいは器質的な問題があったということなのではないか。そのように考える人も多かもしれません。しかしこの記事は医学的知識から説明できるものではありません。なぜなら二人はイエス様に会った時、「神の子よ！」と叫んだからです。当時の人々はまだイエス様のどんな奇跡を見ても偉大な預言者だと解する程度でしたが、この二人はイエス様がまだ何も話していない時から「神の子よ！」と言っています。これは明らかに超自然的な存在が彼らについていたことを示しています。

では今日の私たちは悪霊と何か関係があるのでしょうか。I コリント 10 章 19～20 節：「私は何を言おうとしているのでしょうか。偶像に献げた肉に何か意味があるとか、偶像に何か意味があるとか、言おうとしているのでしょうか。むしろ、彼らが献げる物は、神にではなくて悪霊に献げられている、と言っているのです。私は、あなたがたに悪霊と交わる者になってもらいたくありません。」ここに偶像礼拝をしている人は悪霊と交わっている人だとあります。とするなら今日、何と多くの同胞日本人が無意識の内にも悪霊と関わり、交わっていることになるでしょう。エペソ書 2 章 1～3 節：「さて、あなたがたは自分の背きと罪の中に死んでいた者であり、かつては、それらの罪の中にあってこの世の流れに従い、空中の権威を持つ支配者、すなわち、不従順の子らの中にも働いている霊に従って歩んでいました。私たちもみな、不従順の子らの中にあって、かつては自分の肉の欲のままに生き、肉と心の望むことを行い、ほかの人たちと同じように、生まれながら御怒りを受けるべき子らでした。」この御言葉によれば自分の心の欲望のままに生き、この世の流れに従って生きているなら、私たちは悪霊に従って歩んでいることとなります。このことは聖書を読む上での基本的視点です。イエス様もはっきりヨハネの福音書 16 章で悪魔のことを「この世を支配する者」と言っています。なぜそうなのか。それは最初の人間アダムとエバの罪ゆえです。人間はあの墮落において神を疑い、サタンを信じました。その選択によって神の支配の外に出て自らサタンの下に入ったのです。以来、サタンはこの世に対して特別な力を持ち、この世の王として人々を牛耳っています。悪霊どもはこのサタンに仕える霊です。

私たちはこの悪霊と自分は関係ないと言えるのでしょうか。表面的には今日の箇所のカダラ人と自分は違うと思うかもしれませんが。しかし見た目はともかく、私たちもその生活や心、考え方、健康が破壊されているということはないでしょうか。またここには異常な人の姿が記されていますが、今日の社会にも似たような異常さはたくさん見られるのではないのでしょうか。連日報道される様々な事件、・・・人殺しや詐欺、テロ、暴力、自殺、社会的不正、混乱、・・・。確かに人間が罪を犯しているのですが、その背後に見えない霊の働きがあつて人々を破壊へと追いやっている。いや私たちも同じです。自分は悪霊とは関係のない紳士であり淑女であると普段は思っているかもしれませんが、いつも人間らしい理性や良心の鎖によってつなぎとめられているのでしょうか。常軌を逸して暴走することはないのでしょうか。「魔がさした」という言葉がありますが、ちょっとしたことから思わぬ行動に走り、ひどい言葉を口から発したり、狂暴な態度を取った

り・・・。そうして他人を傷つけ、また自分を滅ぼすようなことをしている。そう考えると、これは人ごとではありません。聖書が示していることは、今日もサタンと悪霊の働きは存在するということです。その支配のもとで今日の私たちもこの二人と同じような悲惨に陥るし、また現に多くの人が実質的にこれと何ら変わらない悲惨と苦しみのただ中にあるのではないのでしょうか。

そんな中、イエス・キリストは悪霊たちが活動する世界の上にも圧倒的な権威を持っているということを今日の箇所は語っています。イエス様がガダラ人の地に着くと、悪霊につかれた二人の人はこうわめきました。「神の子よ、私たちと何の関係がありますか。まだその時ではないのに、もう私たちを苦しめに来たのですか。」悪霊は最初から逃げ腰です。そして31節でこう言います。「私たちを追い出そうとされるのであれば、豚の群れの中に送ってください。」さてなぜ彼らは「豚の中へ」と願ったのでしょうか。悪霊は肉体の中に宿ることを好むということでしょうか。今日の箇所には私たちが疑問に思うことがいくつか出て来ます。しかしこの後、豚は崖を下り降りてみな死ぬわけですから、それではうまく説明が付きません。そこである人たちは、これは豚をこの後に溺死させて、イエス様がこの地の住民から嫌われるようにしようという悪霊たちの最後の悪あがきだったのだらうと見ます。また別の疑問はイエス様はなぜこの悪霊どもの願いを許されたのかということ。この後どうなるかをイエス様をご存知であったなら、これはあまりにも残酷な話ではないか。しかしある人は、イエス様はただ「行け」と言っただけで、「豚の中に」とは言っていない。ただ二人の人から出なさいと言っただけだと弁護します。またもう一つ問われる問いは、豚がおぼれて死んだ時、悪霊はどうなったのか。一緒に死んだのか。それとも豚だけが死んだのか。注解者たちは色々論じていますが、なかなか満足な答えはありません。なぜそうかと言えば、それはこの箇所はもともとそれらのことに焦点を当てていないので、私たちが知りたいと思うそれらのことについては詳しく書いていないだけであるということなのだと思います。

おそらく私たちが最も気になるのは、大量の豚がこのあと死んでしまうことではないのでしょうか。マルコの福音書によれば、それは何と2000匹ほどでした。しかし覚えていて良いことは、豚はユダヤ人にとって汚れた動物であったことです。私たちは豚に深く同情し、もったいないと思います。普段から豚肉に大変お世話になっている者たちとして、2000匹もあればどれだけ生姜焼きが楽しめたか。豚肉のハム、ベーコン、ステーキを食べられたことか！もったいない！あ～もったいない！と激しいショックを覚え

ます。しかし最初にこのニュースに接した当時のユダヤ人はそうでなかったかもしれない。彼らにとっては大惨事と言うより、「ヤッタ！」と手を叩いて喜ぶ出来事であったかもしれない。私たちにあてはめれば、私たちが忌み嫌う生き物を考えてみると良いかもしれません。たとえばゴキブリ。悪霊たちがあのゴキブリに乗り移らせて下さいとイエス様に願って、大量のゴキブリが一斉にゴキブリホイホイに向かって突進してみなそこで死んだらどうでしょう。「素晴らしい話だ！」「汚れた生き物も一緒に退治されて一石二鳥だ！」と手をたたいて喜ぶのではないか。もしかするとユダヤ人にとっては、これと似た感覚であったかもしれません。

いずれにしろ私たちが汲み取るべきはこのメッセージです。おびたしい数の豚はまるで濁流のように坂を転がり落ち、次々に悲鳴を上げながら海に飛び込んで行きます。そしてのどを鳴らし、水を吹き、恐ろしい音が湖を囲む山々にこだましました。そして次の瞬間には溺れ死んだ豚の死骸がプカプカと湖の東岸一杯に浮かんだ。それは何と茫然とするような光景だったでしょう。このことは悪霊どもの力がいかに破壊的なものであるかを物語っています。これほどの力が実は先の二人を支配していたのです。そしてこのことが目に見える形で示されれば示されるほど、この悪霊たちを「行け」というたった一言で追い出してしまわれたイエス・キリストの驚くべき「権威」と「人格」とが如実に示されることにもなったわけです。

このようにイエス様は、サタンと悪霊の支配下にあるこの世界に神の国をもたらすために来たということこそ今日の箇所が語っていることだと思えます。イエス様はどうしてこのような力と権威を持っているのでしょうか。神の子として、しようと思えば何でもできるということでしょうか。そう単純なことではありません。この世界の上にサタンが力を持ち、この世が様々な苦しみのもとにある原因は、先に述べたように私たち人間の罪です。ですから罪の問題の解決こそカギです。それを不問のまま、ただ罪人を救うということは正義の神にはできません。そこでイエス様は神から遣わされて、私たちの身代わりに私たちが受けるべき罪の呪いと罰をすべてご自分の上に引き受けることによって、私たちが救い出してくださるのです。神である方が人となってささげのいのちは無限の価値を持ち、無数の人々を救う力を持ちます。イエス様はその苦しみと罰を、これからの十字架に至る激しい戦いの生涯と死をもって、すべてその身に引き受け、それを受け切った方として三日後に復活されます。こうしてこの世に対するサタンの支配を無力なものとして、ご自身により頼む全ての人を自由にその下から救い出すことがで

きるのです。コロサイ人への手紙1章13節：「御父は、私たちを暗闇の力から救い出して、愛する御子のご支配の中に移してくださいました。」十字架の出来事は、今日の箇所ではまだ先のことになりますが、イエス様は必ずそれを成し遂げる方として、すでにその前味をここに示しておられるのです。そして今や十字架と復活を経たイエス様が「わたしには天においても地においても、すべての権威が与えられています」と復活後に宣言されたように、確実にそのみわざを成し遂げた方として豊かにその権威を発揮する救い主となっていてくださるのです。

この方に対する私たちの応答はどうでしょうか。豚を飼っていた人たちは町へ行き、人々に告げます。すると町中の人々がイエス様に会いに出て来ました。歓迎するためでしょうか。そうではなく、「どうかこの地方から立ち去ってください」と願うためでした。彼らはここに差し出されている素晴らしい恵みの世界を認めることができませんでした。彼らとしては、このような恐ろしい力を持つ方がそばには落ち着いた生活ができないと思ったのでしょう。あるいはまたあのように大量の豚を失うようなことがあつては、たまったものではないと思っていたのかもしれませんが。目の前には人々がどうすることもできなかったあの二人の人が、悪霊から解放され、健やかな状態とされている現実があるのに、すなわち闇の力から私たちを解放し、神の祝福に生かしてくださる素晴らしい救い主が来ておられるのに、「どうか他へ行ってください」と願ったのです。果たして私たちの応答はどうでしょうか。

この世界では人間が一番偉く、人間が自分の思う通りに生きているわけではありません。この世界と私たちの上には、闇の力、悪霊たちの活動、サタンの働きがあると聖書は語っています。この悪霊に人間の力で勝つことはできません。人間が太刀打ちできる相手ではないのです。賢いと自らを誇っている人間も、気づいた時には多くの悲惨に投げやられています。その先にあるのは益々破壊され、滅びに至る人生です。私たちはその霊の世界が今もあることを認め、また感じるのでしょうか。しかし私たちにとっての福音は、この霊の世界の上にも圧倒的な主権を持つ方がいることです。私たちをやみの支配から解放し、神の祝福に生かしてくださる主。この主イエスこそ、あらゆるこの世の悪の現れとその力に対するアンサーです。この方に信頼してあらゆる悪の力から守られ、主が勝ち取ってくださった勝利にあずかり、神に造られた人間としての本来の健やかさと自由を取り戻し、やがて完成する栄光の神の国に向かう歩みを導かれて行きたいと思えます。